

RESAS の教科書

リーサス・ガイドブック

あの街はなぜ賑わうのか
データが地方創生を加速する

日経ビッグデータ

リーサス
**RESASは日本の
競争力を取り戻すための
ツールである。**

前 地方創生担当大臣
石破 茂

データと事実に基づく地方創生が始まり、
行政や政治だけでなく、市民や教育も変わる。

日経BP社



データは体験や経験の積み重ね
地域の未来を明確に思い描ける

尾畑 留美子 氏
尾畑酒造 専務取締役



私の仕事は新潟の佐渡での日本酒造りです。生産するその地の風土や杜氏の熟練の技や勘。一見、データから遠い世界に見えます。そんな私が RESAS と出会い、ビッグデータと地域創りについて感じた3つのことをお伝えします。

1つ目は「データは共通語」ということです。例えば日本酒の甘辛の感じ方は人それぞれですが、そこにデータが入ることで指標が見えるようになります。地域活性化といっても概念はバラバラですが、そこに客観的な指標が入ることによって共通の認識ができます。思い込みから脱却した地域創りにデータは欠かせないものです。

2つ目は「データは生きている」ということです。客観的なデータの積み重ねから現象と変化を分析するのですが、この値は生き物のように刻一刻と変化を続けています。データは血の通った数字であり、生かすも殺すもその使い次第ということです。

3つ目は「ありたい姿を描く」ことの必要性です。ビッグデータはカーナビのように最短かつ最良の道を導き出してくれるでしょう。しかし、重要なのはその行き先です。あるべき姿の先にある「ありたい姿」。その思いが何より大切ではないでしょうか。

実は日本酒造りにもデータの蓄積が生かされています。データは単なる数字ではなく経験と歴史の積み重ね。そこに学ぶことで、思い描く「美味しさ」を生み出すことができるのです。

地域の未来を「形」にする時も同様です。思い描く未来にアクションを起こす時、それを促してくれるのがデータというエビデンス。RESAS という誰でも使える強い味方を得た今、地域の未来や可能性を今一度明確に思い描くことができるチャンスが到来しています。

政策立案の視野が広がり、参加も増える
膨大な情報の選別・推奨機能に期待

坂田 一郎 氏
東京大学 工学系研究科教授
政策ビジョン研究センター長



RESAS は省庁や地域、さらに官民の枠を越えて、これまでにはない包括的なデータを我々に提供してくれるものです。

企業や住民の活動範囲は、ほとんどの場合1つの行政区域に閉じるものではありません。また、観光業と農業のように、複数の領域が密接に関係する場合も多くあります。

これまで、行政の視野はどうしても行政範囲や行政分野に閉じがちでしたが、多様で地域横断的なデータを簡単な方法で得られる RESAS の登場により、現場のプレーヤーと同じ景色を見ながら、同じ範囲の情報を持って企画の立案

を行うことが可能となりました。

RESAS が提供してくれるデータはこのように有用なものです。データだけで優れた政策や企画の立案ができるのは極めてまれです。データからある指標の現状やトレンド、他との優劣などは読み取れますが、多くの場合は、「なぜそうなのか」といった要因や背景は教えてくれません。また、地域に芽生えている将来の可能性をデータだけからくみ取ることも困難です。

従って政策の立案に際しては、データと現場の情報や過去における政策の経験などの情報を組み合わせることが欠かせません。実際、2015年末に開催した「地方創生☆政策アイデアコンテスト」で高い評価を得たチームは、現場の調査もしっかりと行って提案に取り入れていたのが印象に残っています。

今後、RESAS には収載するデータの幅を広げるとともに、データに加えて政策に関連した文献情報を蓄えること、さらに大量の情報の中からユーザーの目的に合った情報をレコメンド（推薦）する機能を追加するといった形での発展を期待しています。